

多自然川づくり取り組み事例

タイトル：『四万十川自然再生事業』から生まれた地域協働体制の紹介	
水系／河川名：渡川水系四万十川・中筋川	河川分類：大河川
河川の流域面積：2186km ²	整備計画流量：13400m ³ /s(W=1/30) セグメント：2
事業：環境整備	事業開始年度 平成14年度
目標設定：定性的	段階：D(実施・施工時)
課題・目的(主な)：礫河原、砂州・中州の保全・再生・創出、瀬・淵の保全・再生・創出	
工法(主な)：掘削(高水敷)、掘削(低水路)、樹木伐採、除根	
配慮事項(主な)：河川景観への配慮	

背景・課題、目標設定

<背景>

高度経済成長期以降、かつてあった四万十川の良好な自然環境が失われつつあり、アユの産卵場となる早瀬の減少、スジアオノリやコアマモの生育環境となる汽水域の浅場面積の減少により、四万十川を代表するアユ及びスジアオノリの漁獲量が近年激減している。また、アカメなどの魚類の仔稚魚の生息場であるコアマモの減少や、中筋川流域を中心としたツル類の渡来・越冬も、渡来・越冬環境の変化により減少している。

<目標>

四万十川自然再生事業の実施により、現在も残る自然を保全し、良好な自然環境へと再生するとともに、人と自然とが共生できていた昭和40年代の四万十川の原風景の保全・再生を目指している。

<四万十川自然再生事業の構成>

- アユの瀬づくり事業：アユの産卵場となる瀬が広がる昔ながらの河原の風景の再生
- ツルの里づくり事業：ツルたちが安心して越冬できる里づくり
- 魚のゆりかごづくり事業：四万十川の生き物を育む汽水域の浅場の再生

取り組み内容・対策例

- アユの瀬づくり事業：樹木の伐採・間伐(疎林)、砂州切り下げによる二極化の改善、浮き石の早瀬・砂礫河原の再生・維持
- ツルの里づくり事業：樹木伐採、高水敷掘削による湿地環境の再生、河川の連続性の確保(樋門の段差解消)による底生動物増加への取り組み
- 魚のゆりかごづくり事業：砂州の切り下げによるスジアオノリ生育水深帯の再生、高水敷掘削による静穏な浅場の創出



ツルの里づくり事業による湿地環境の再生



魚のゆりかごづくり事業による静穏な浅場(ワンド)の創出

モニタリング結果、アピールポイント、今後の対応方針

四万十川自然再生事業の実施にあたり、学識者や地域の約80の団体が構成される『四万十川自然再生協議会』をはじめとする地域との協働・連携、事業実施箇所での環境学習等の継続的な取り組みなどが始まった。

特に、アユの瀬づくり事業箇所では樹木の間伐後、高水敷に菜の花が自生し、『入田ヤナギ林菜の花まつり』として地域が主催する四万十市の一大イベント会場として定着するなど、事業実施がもたらす社会的な効果が様々な場面で得られている。

アユの瀬づくり事業

貴重種も確認され保護活動に発展→



地域の主催による菜の花まつりの開催

ツルの里づくり事業



ツルの里づくりの会と連携した学習会やイベントの開催

魚のゆりかごづくり事業



学識者の指導による小学生の移植作業

備考

問い合わせ先 中村河川国道事務所 計画課
電話番号 0880-34-7306

『四万十川自然再生事業』から生まれた地域協働体制

Keywords : 礫河原・ワンド・湿地の保全・再生・創出

● Before



● After

樹林化した高水敷の樹木の間伐・伐採により、洪水により攪乱されやすい環境にすることでアユが産卵できる柔らかい礫河原を再生を目指す



四万十川自然再生事業の実施により、地域との協働・連携、事業実施箇所での環境学習等の継続的な取り組みなどが始まった。

事業後、高水敷に菜の花が自生し、地域が主催する一大イベント会場として定着するなど、事業実施がもたらす社会的な効果が様々な場面で得られている。